

# 鳥取縣と土木行政 (三)

前田 豊

## 七 改悔社を創立して鳥取縣の再置運動を起す

以上述べ來つた様に鳥根縣當局から冷眼視されたので廢縣後の鳥取縣民は陰慘な雰囲気の中に夢遊病者の様な忙しい生活を送つて居つたのであつた「醒めよ兄弟」と鐘を撞き鳴らす者もないのである「汝を視よ、道を歩け」と揺り起す只一人の先驅者もないのである。石原常節翁の「鳥取縣再置の顛末」の一節に左の如きことが書き連ねてある。

鳥取縣に於ける縣治の存廢は切に其安危休戚を感ずべき焦眉の大問題なるに拘らず市民の之を冷眼視して自ら處すべき當面の措置を講せず唯々として政府の一令に服従し遂に何等輿論の喚起を見ざるは何ぞや封建の餘習未だ脱せず官尊民卑の弊實に之をして然らしめしは怪しむに足らざるなり殊に立藩以來政治上獨特の權力を占め鳥取の股脈に至大の關係を有する士族の如き維新の大變革に會ふて漸次其活路を失ひ窮困落魄倒産の徒頻年相繼ぐ此時に

當り此輩何の餘裕ありてか何を顧るの違あらむや云々。

だが然し人々は變轉極りのない此の世相に直面して、全く饑えに苦しめられ虐げられ鞭打たれて居るのである此の様な際誰とて明らかにか嗤笑し得る者があらう。國家を懐ひ縣政を議する前に先づ陋巷に窮死する自己を考へねばならなかつた、その上悲しいかな大衆はあまりに無明であつた、斯る時代に處する智識と覺悟に欠けるものが餘りにも多かつたのである。當時鳥取の街には三十七ヶ町があつて別に代議機關がなかつたから各町の總代が選喬小學校に集合して街全體の財政に關し豫算などを決めたものであると云ふが校内に議場が特設されて居る譯でないから廣い室の正面の床の間を議長席として番外が其側に居並び總代に議事を語り説明が終ると番外が賛成か不賛成かを尋ね養成の人に起立を求めると各町の總代では「起立」の意味が皆目わからず「もう濟んだから歸つてよろしい」と云ふ意味に考へて皆ゾロ／＼立つて歸りかけたと云ふ珍談もある位で總代と云へば相當智識階級の人であつ

たろうがそれが何が何やらわからないで、盲目的に時の流れに引き摺られて行つた時代相の面目が躍如として居る。

鳥取には縣が廢止されて以來鳥根縣の支廳舎が元縣廳跡に置かれ室木閣之輔といふ人が支廳長となり若槻敏(若槻元首相の養父)氏など二三の人が縣屬として勤務して居たが縣の方針が鳥取地方を無理矢理に抑壓するのみに傾倒して居たので支廳の事蹟は殆んど擧らず明治十一年郡役所が設置されることになつたので自然と松江に引き上げて仕舞つた。

國家に危機を染んだ西南役が終りを告げた頃から全國的に不景氣が襲來し食祿を離れた士族は窮乏のドン底に陥り商家は倒産相隨ぎ農業は連年の不作であり米價のみが底知らずに昂騰する、それに悪疫が猖獗を極めてあちらにもこちらにも死人を燒く悲しい煙が立ち上つて居るが官憲はこれら悪疫の善後策を殆んど講じやうともしない、因伯二洲は鳥根縣から厄介物扱ひされて居て課税は比較的重く賦課せられるばかりであつた。このまゝで進んで行けば因伯二洲はどうなるであらう何事か起らないで済むであらうか山雨將に至らんとして風堂に滿つるものがあつた。無氣味な明治十二年も暮れて陰鬱な十三年の春を迎へた、窮乏と不平の聲が巷に充つる其の年の夏國境駒返り坂を越えて智頭往還を只管鳥取に急ぐ一人の警部があつた白い官服にサーベルをガチャつかせて歩く姿が當時の田舎の人達には甚だ珍しかつたと見えて來る人も

往く人も皆目を見張つて見送らぬ者とはなかつた。この警部殿こそ世に物凄く思はれた改悔社後の共鑑社の首領足立長卿と云ふ人であつた。實に無軌道を走る大惑星の出現である。彼足立長卿は海軍少尉をやめて西南事變の際佐賀縣の警部を務めて居たが天衣無縫の素質が崇つて明治十二年浪々の身となり暫らくブラブラして居たが更に岡山縣警部となつて津山警察署勤務を命ぜられその夏九年振りに墓參を兼ねて懐しの鳥取を訪問したのであつた、鳥取市内智頭街道筋柳柳附近の某宿屋に泊つて居る内「足立が戻つて來たそうだ」といふので舊藩士が入り代り立ち代り訪問に來たが誰も彼も貧乏話をせぬ者はない日々の米代にも差支へて居るような人ばかりで、よくもそれ程貧乏のドン底に落ちたものだと思はれる程みぢめなものであつた。今日も今日とて十數人の人達が期せずして足立氏の宿に集つて來てお互に生甲斐のない生活を嘆じて居ると足立氏は聞くに堪えざるものありてか面を朱にそめて憤慨した。

「何と云ふ不甲斐のない話だ假令どんなに貧乏でも意氣天を衝くの概があればその日／＼の飯が食へぬといふ事があるものか皆がお互に腹を合せて禪を締めてかゝらないから何事も出來ないのだ」暫くは一座の人達が氣を吞まれたように黙つて居たが田中寛治と云ふ人が「なる程天晴な今の一言である。然し働けばよい飯が食へると云つた所で如何な方法で働けばよいのかといふ説明は

ない。一體どうして働けばよいのか」半ば答めるような半ば相談するような口調で問ひかけた、居並んで居つた貧乏士族の人々が聲を揃へて「そこだそこだそれが聞きたい」と思はず叫んだのであつた、足立氏がブンブン怒つた顔をしながら奮然と云ひ放つた。

「働くすべは如何程でもある、官途に付ても飯位は食へるではないか、役人が嫌だといふなら當世流行の自由民權論を主張する演説會を開いても相當の収入があるではないか」「そうだ成る程もつともだ然し役人になるとしても仲々オイソレとなれそうもないし役人に皆がなつて仕舞ふことも出来まい、いつそ手近かで出来る威勢のよい演説會でも開いて煙草代でも稼がうではないか」と數人の者が聲を合せて賛成したので一座の人々が思はず釣り込ませて了うした氣になつて一仕事する腹を決めた、そして自由民權論は最初之の踏み出しとしてはあまり突飛であるから耶蘇教宣傳の演説會を開き、足立氏を盟主とすることを申合せた。耶蘇教と自由民權とは木に竹を繼いだやうな話であるが元來足立長卿が耶蘇教徒で自分の娘に其の時代に「マリヤ」と命名して役所に届け出る程の新し屋であつたから茲に「改悔社」と稱する團體が出来上る事になつた。

津山から歸省する時にはいゝ氣持になつて長いカーベルをかちやつかせて道行く人を珍らしがらせ暮參でも濟んだら直ぐにでも歸在するつもりで居た警部殿はこうなると一日も早く官服を脱ぎ

捨てゝ仕舞はなければならぬことになつて了つた。取るものも取り敢へず津山に行つて官を辭し、風の如く鳥取に舞ひ戻つて來た。津山署でも結局もてあました警部殿が居なくなつてホツとしたことと思はれる。

足立長卿氏程生涯の數奇を極めた人は尠なからうと思はれるが茲に波瀾重疊たる二三の逸話を擧げて見ることにしよう。

明治二十六年東京自由新聞社發行「板垣退助君傳」の中戊辰の役を叙する一節に土佐軍が日光今市駐屯中の出來事を記載して曰く、「時に因洲の士あり日光の廟に至り草鞋を着けて祠壇に上り唾罵して曰く吐賊首の廟と。漫侮凌辱到らざるなし。一山恂々官兵を恐るゝより甚し君之を聞いて殊に憤慨する多し……因つて議隊を率いて廟に至り云々」この因洲の武士と云ふのは足立長卿氏であつたと云ふ事である。この時は因洲土洲の兩軍が隔日先鋒となつて東山道から進み佐幕軍を追撃した時の事であつて足立氏が日光廟の奥深く土足で上り縦横無盡に荒れ廻つたのは彼の曰く「當時賊將大鳥等日光據守の風説あり且つ山僧等四百年の餘威を挾んで頗る不遜の態度あり故に威を以つて之に臨む必要ありしのみ」と云ふ次第であつて漸く板垣退助などに宥められて腹の虫を殺して其儘無事に歸隊したのである。かさもなくば日光廟を残らず焼き拂ふつもりであつたと云ふ事である。此時萬一實際に火を放つて居たなら世界に工業建築の精華を誇る日光廟も慘憺たる燒野原と

化して居たかも知れない。聞いた丈でも慄然とする話である。因洲藩士が日光廟燒撃を計畫したとき板垣伯が嚴重に抑制して讒かに事なきことを得た話は汎く傳へられ日光地方の人は日光の今日あるは板垣伯の賜物なりとして磐去の前年頃その記念碑建設計畫があつたと云ふことであるが果して建碑されたか如何かは詳ではない。

足立氏が後年淡路の某氏と邂逅した時某氏の問ふ「奥羽戦争の時因幡藩に參謀足立勘四郎といふ大亂暴者が居たがあれは貴下の御親類でもあつたのか」「いやその勘四郎が今は長卿と名が變つて居るが全く自分の事だ」雙方こゝで大笑ひしたと云ふことであつた。これ程足立勘四郎の名は大亂暴者として各藩に響き渡つて居つたものであつた。又東京上野寛永寺の戦争の時にはその寺院に在つた銀製鷹の置物を分捕り歸りその掠奪品で刀の飾りを拵へ大威張をして居たと云ふ説もある。彼は十四五歳の時から大義名分を唱へ思ひ切つた激論を吐いたものであつたそうだが當時人々は彼の將來實に恐るべきものと驚嘆して居たとの事である。彼の議論は長ずるに従つて益々激越を加ふるに至つた、當時藩論は勤王佐幕の兩派互に鏑を削り談論紛々たるものであつたが何分藩の政權を握つて居るものが佐幕黨の旗頭、田村圖書と云ふ人であつたから勤王黨は氣勢甚だ揚らなかつた、然し若い血に燃える青年達は勤王の大義を貫徹するためには脱藩もしかねまじき勢であ

り平素の舉動も亂暴を極め佐幕派の身邊に危険を感じしむる様になつたので田村圖書は窮餘の一策として「國事多端の際我藩は如何なる所置を採るべきか腹藏なき意見を上申せよ」と藩の者に申渡した。そして過激な上申をした者には残らず謹慎を命じ足立氏も閉門同様一室に押込めらるゝ憂き目を見たが一年許りすると謹慎を許された、時恰も自分が日夜崇拜する勤王黨の頭領因洲二十士の詫間半六が伯耆の國黒坂に引き上げたと聞き十九歳になつた許りの足立長卿氏は野一色清治氏(野一色益吉の殿父)と二人して青谷村の關所を破り黒坂に親しく詫間を訪ね慰問かたがた懇談を遂げ再び早駕籠を飛ばせて青谷の關所を破り抜けて歸宅し短時日の往復の事だから誰も知る者はあるまいと何喰はぬ顔をして居た事が藩の知る所となり藩の禁を犯して關所を破つた罪に問はれ遂に切腹を命ぜられることになつた、其の時津田傳兵衛といふ人が足立一色兩名が關所を破つたため切腹を命ぜられるならば二名の者に破られた青谷關預りの役人の責任も輕くないから中嶋某初め四十餘名の者も悉く打首の刑に處すべきであると痛論したので切腹をせずともよい事になり辛うじて命を保つ事が出来た、次は鳥取縣再置が出来た後明治十七八年の交足立氏は神奈川縣警部となつた、これは當時の縣知事が鳥取出身の沖守固氏(後に男爵)であつたので同郷の誼みで採用したのだが流石の沖知事も足立警部だけにはホトホト弱らされたと云ふ事だから當時警察部長であつ

た田健次郎氏などは足立氏には少しも押しが利かす氣隨氣儘の振舞をさせて居たものである。ある時 明治大帝時代皇居陛下が江の島遊覽に御出でましになつたが其の日はどうしたものか御慰みに供する曳綱の獲物が尠く何となく殺風景に思へたので沖知事は非常に恐懼した揚句世馴れた足立警部に何かよい思案でもあるかも知れないと早速呼んで聞いて見た處足立長郷氏は警部の職には居たが殆ど仕事をしたことも無く警部の官服など何日の間にか無くして仕舞つて平氣な顔をして日を送るのが常であつたが此の日は殊に新しい官服を支給して貰ひ日頃から馬術には精練して居るので得々として乗馬で先驅を承り曳綱を拜觀して居たが知事から今更のように相談されたので兎角の思案にも及ばず突嗟に「それは丁度よい事があります○氏と閣下とがどちらも服を脱いでその砂の上で相撲をとつて台覽に供したら如何ですか」と憚る色もなくやつてのけた○氏は宮内省の大官で非常な脊の低い肥満した人で著名であり沖知事もでつぷりと太つた脊の低い人であつた一寸法師の相撲のようでさぞ可笑しからうと云ふ意味を籠めて云つたのである、並み居る一同あまりの放言に度膽を抜かれてあつとばかり立ちすくんで仕舞つた、沖知事の顔は見る見る中に紅潮して激しい憤怒に身を振るはせて言葉もなく暫く足立警部を睨み付けた、そして十九年には足立氏は沖繩縣警部に左遷されて仕舞つたのである。足立氏はかくの如くその眼中には長官も大官

もなく窮屈な社會道德に律せられるでもなく人を人臭いとも思はぬ放縱不羈の態度で七十餘年の一生涯を終始したのであるがこれは單に社會に對する方面のみでなく家庭の主人としても家族に殆ど温かみや慈しみを持たず全く捨てゝ顧みないと云ふような稀に見るエゴイストであつた、かゝる無軌道の大惑星に主宰されたその名も恐るべき『共斃社』(改悔社の後身)がいかにか因伯の野に躍動したか人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬るの慨が容易に想像され得るではないか共斃社が組織される以前に鳥取藩士の一團で『貧窮隊』と稱せられるものがあつた自分で特に貧窮隊と名乗つた譯ではなかつたがその周圍の人達がみんな貧乏隊々々々と呼ぶのでそれがとうとう通り名となつて仕舞つたのである隊が組織されたのは明治十三年の春で貧乏士族を相互扶助的な意味で救済しようとして云ふ目的で初めは少數の人達が集團を造り現今の縣商品陳列所の地點に當時招魂社が祀られて居たのであつたが其所の門衛を勤めて居た中村某氏の宅を會合場としていろ／＼な事を畫策中偶々刑事事件に觸れる事が持ち上り團員の數名が處罰されたため貧窮隊も事前に瓦解しかけたのであるが、今更それも残念である秋山實。小倉直人。箕浦太中。山口一樹等數氏の人々が駆起して貧窮隊を繼續し更に廣く同志を募集して貧乏士族救済の策を講ずる事になつた。その當時の士族には裕福な人としては殆ど無く藩の家老職の筆頭荒尾但馬氏の如き一萬五千石を領して居た人で

すら藩末に滅祿された際公債證書で支給を受けたものは僅か蚊の涙の六百石に過ぎず千石取の人が三十七石に見積られて一千圓あまりの金額を記入した一紙片を握りせられたのみで之を以て永世の扶持から突きはなされて仕舞つたのである。なほこの公債證書とて後生大事に箆笥の奥深く藏つて置ける程財政的に餘裕のある人は絶無であつてそれまでに背負へるだけの借金は爲し盡して居る有様であつて是等の證書は殆ど全部狡猾な金貸業者の懐に捻じ込まれて仕舞ひ残るものは生業を持たない家族と破れ疊ばかりであつた、それで居て少しでも金錢を握り得る人はヤケの皮で新地遊廓に浸り込み利那的な享樂のため瞬く間に綺麗盛張りと蕩盡して仕舞はずには居られないほどその氣持は荒んで居た。當時の金貸業者は假へば百圓の借金證書に對し手數料として最初二割を差引き尙期間迄の利子勘定をしてそれも引き去つた上現金を渡すのが普通であつて困り抜いて居る士族の手上につけ込んで生血を絞る様な慘酷な手段を弄する者もあり此の様な手段に操られて次第にひどい貧乏のどん底に沈んでしまつた人も尠くは無かつたのである此の様にこまり果てた士族達で『貧窮隊に加盟すれば救済の方法を何とか講じて貰へるだらう』といふ期待を持ち續々と入隊する者が出來遂に二千數百名を算する程になつた。茲に於て一同此の窮狀を打開するため連署して縣當局に迫り適當の方法を以て吾等の生活苦を救助して貰ひたい、と云ふ嘆願書を差出す事にし

た。之を受け付けた邑美郡役所などではさしづめどうすることも出来ないので嘆願書の主要な人を數名呼び出して嘆願書の内容が不條理なることを百方説諭し尙書式等も不備の點があるため更に正式の手續を履んで差出すようになど命じ歸宅せしめ一時を糊塗して居たこともあるすると、貧乏隊は數日を出ぬ内に今度は「舊鳥取縣内に五箇所の官林を總額一萬一千圓で至急拂下げて貰ひたい」と申出たり一方郡役所ではそんな馬鹿な事が縣廳に取次げるものかと一蹴し貧乏隊ではいつかな聴き入れる様子なく郡長などがそんな事に容喙すべき限りではない、是非とも縣に取次いでくれと強談し縣に申達したが縣でも詮議致し難しと撥ねつけて仕舞ふことになつた。すると貧乏隊では此度は手を變へて當時の縣令境二郎氏に「鳥取地方の慘狀巡視請願」と言ふものを差出した。その内容は士族は愈々困窮に陥り藩士の邸宅は概ね取壊されて荒廢の地と化し加ふるに當時西南戰役のために政府が不換紙幣を濫發したため物價は非常に騰貴し、たゞに士族のみならず各細民の貧困極度に達し、商業は沈滞し各主要行通道路は荒れるに任せて些の修繕さへ加へられず鳥取市街は日に日に萎微し將に寂寞の巷と化せんとして居るから賢明な縣令に巡視してもらひたいといふにあつた。この請願は充分な理屈があるので縣も嫌やとは言へない破目に陥り澁々ながら縣の高等官を一二回巡視に來鳥せしめた。しかし巡視と言ふのはホンの形式に留まり實際に窮困者を救済又は

因伯の行政運用をもつと民衆の輿望に合致せしめようとする氣持は寸分も持合はせてゐないのであるから匆々に逃げるやうにして立歸つてしまふのが例であつた。初めは溫和しかつた貧窮隊も縣當局の眞意を知るに及んで此の儘では駄目だ何とかして初志の貫徹を計らねばならぬと叫ぶ聲が期せずして一致してしまひ、自然といろ／＼な方面に示威運動が初まる様になつて來た、其處に端なくも足立一派の改悔社が出現をしたのである。改悔社は數度に互つて耶蘇教宣傳演説會をやつて見たがどうも油が乗らない、いくら手まね足まね聲色を使つて見たところではほんたうに神の子の前に跪いて心からの祈禱を捧げる人も現れさうもないそれはそれとして社員の日々の糧が満ち足りさうもないのでソロソロ地金が露はれるやうになつて來た何日の間にか耶蘇などは置いてけ放りにしてしまつて縣當局糾弾の烽火を擧げ貧窮士族の救済の急なることを激越な口調で會衆に語るやうになつて來た、貧窮隊でも同一の意味で畫策し策動して居るので成立當初の動機はそれぞれ異るとしてもかうなれば雙方共目的が結局同じ事であるから何時とはなしに相互提携する様になり兩團體間の感情的齟齬や相容れぬ目的論が無いでも無かつたが、それも溶け合つて遂に全く純乎たる一團體を結成することになつて、社長に足立長郷氏を押し樹てることになつた、これが十三年の夏も暮れかけた頃の事である。

一心協力することである。數百數千の團員がびつたり純一になる事だ、團の統制目的の爲には全く自己を忘れ切つてしまふ事だ、しかるに由來鳥取人には團結力が薄いのが最大缺點だと稱せられて居る、貧困士族の救済、生活方式の打開を目的とするならば、その實現を期する爲めには出來得る限りの手段を盡さねばならぬ、かやうに足立氏は力説したのであつた『先づ活んとするには死を賭するの大覺悟がなくてはならぬ』若し事成らずんば社員全部が一人も残らず一緒に斃れよう』足立氏は森嚴莊重な口調で斯く社員に言論し社名を『共斃社』と名づけた。人情の常を以つてすれば名を冠するに當つて大抵は前途の光明希望向上などを祈り祝福して彌が上にも幸先よかれと十二分に吉瑞に満ちたものを選ぶものであるが『共斃』には何の明るさも悦びも無い、大死一番悲痛極まる決意を示すのみである、これを第三者から見ればこれ程氣味の悪い名はまたとあるものではない、叢々と妖氣を含んだ村正の大刀を帯びた血笑組でもあるかのやうに想へてその名を口にするだに慄然たらざるを得ない氣持がする、實際に於て共斃社の一同はこの結黨に際し若し事成らざる時は五千の社員が日本の各主要都市に潛行し、同一時間を定めて火を放ち炎々として燃え盛る劫火の中に身を跳らせて憤死しようといふ事である。共斃社員の素志が成ると成らざるとに就いて全國各主要都市は何等の交渉を持つものでない、然るに事成らざれば悉く主

要都市に放火するといふ計畫は甚だ條理の透徹しない亂暴な申合せであるが共黨社の人達はそれ自身の計畫が如何に否斜したものであるかを靜に省察する隙のない程決行力に燃焼し切つて居たのである、當時足立長郷氏は鳥取瓦町箕浦屋敷の長屋に住ひ極めて貧乏な暮しをやつて居たが共黨社の人氣が日々高まり毎日入社申込みの人が殺到し、そして連判狀に署名捺印して行くので手狭な家では仲々事務が執れなくなつてしまつた、幸社員の幹部級である託間護郎氏の宅が市内本町二丁目の中央にあつて三階建の堂々たるものであつたから（現在の宇山耳鼻科病院はその三階建に改造したもの）これを無料提供せしめて事務所とし入口には堂々たる「共黨社」の大看板を掲げ入口並に三階には國旗と共黨社旗とを交錯し邸前には提灯台二箇建て、社名入りの大提灯をつるし何か事ある際には多數の高張提灯を邸前に押並べなどして字義通りに大いに門戸を張つた。此の様にして貧乏士族が俄かに豪勢な構えを見せだしたので知るも知らぬも驚かぬは無かつた警察方面でも素破とばかり内偵を初めるようになった、幹部には副社長が秋田實氏これは外交方面受持の大將實行委員長が託間護郎氏庶務係岡村經愛會計印刷に鐵田宣照高見長敏の諸氏がそれぞれ任につき米子には分社を置いて赤崎町以西を管轄せしめ小倉直人氏が支部長となり劍道家の安藤定幹氏や木間勝哉氏がそれを補佐し兩地相呼應して非常に活躍した、其他。泊。由良。加露。橋津。等の要

港には出張所を設け加露には加藤武造三枝勝彌の諸氏が主任として社員と共に大いに働いた、入社資格としては別に八釜數いものはなかつたがたゞ連判狀に記名捺印すれば何人でも共黨社社員であり得るのであつた。社規と云ふ面倒な規則も無かつたがその申合せの條項の中には共黨社員は官廳に奉職することだけは絶対に許されなかつた、それ故強いて勤めたい人は他縣で奉職するより他仕方がなかつたのであるが、實際に於て他縣に向いてまで奉職する人は稀であつた、何故に官廳に奉職することを嫌つたかと云ふと官吏に任命されて上司から懷柔されることを恐れたのである、野育ちの荒くれ武士の奔放な自由さを極端にもちたかつたからであり、またスパイなどに折角の結束を蹂躪されることを未前に防ぐためでもあつた。其の他に面白いことは「社員は重役會の決議により武術試合を望む場合は辭退せず」「試合中負傷して死に至る共毛頭苦情申出でざること」と云ふ物凄い條項のあることである初めの頃は一見平凡であるやうに考へられるがこれは多數な社員を擁しその制御に多大な苦心を要するのと社員の中にはブラツクリストに載りそうな亂暴者が少くなかつたので豫め極端な豫防線を張つて社の體面を穢す人があつたり或は又社の金錢を私消するとかの事件の起きた場合には必ず武術試合を開いて代るがはる撃ちのめし皆して殺して仕舞ふ大方針を指示したものである。それでも十三年の冬には社員の中から強盜殺人犯を數名出した程



である。社の幹部級の人達では前記の外に徳川鐵藏。箕浦太中。渡邊立男。今井浪人。三ヶ月源八。平田正治などの諸氏が有名なもので三ヶ月源八氏は耳が大で顔が非常に物凄く市街の婦女子からは鬼の如く恐れられ尙由來激しい潔癖性のため年中赤貧洗ふが如く、その住居も立川天神下の堀立小屋同様の廢屋に起居して居たが過激派中の過激派であり、心の底から暴動舉兵を希望して屢々足立社長を觀説したといふ事である。今井浪人氏は劍道の達人にて兩刀使と鎖鎌の名人であり、神體直朋流の體術にも長じ奥羽戰爭の際會津附近で敵百十一を取つて愛馬の飾とした程の人であつた副社長たりし小倉直人氏は獨眼龍と綽名せられ沈着豪毅の人で又酒豪であつた、演説が大變上手で雄辯家の平田正治氏と二人で島根縣當局彈劾演説を松江附近で開いた事もあつた。共弊社が組織されたことが世上に擴まるにつれ日々糊口に窮して居た貧乏士族がゾロゾロと相踵いて加盟して來た社員になつたら何もしないで食べると云ふのが彼等の唯一の目的であり願望であつた、斯した有様で社員は非常な勢で激増して來た共弊社の事務所門前は新しい社旗が翻騰として翻り高張提灯が物々しく立ち並び羊羹色の短い羽織を一着に及んだ士族が華々しく出入する街の人も官憲もスワとこそ目を欲だてずには居られなかつた、何とも云へぬ薄氣味の悪い風が本町二丁目を吹き捲くつて襟元を毛虫が這つて居るよりの戦慄さへ感ぜられた社員の數は二千名或は三千名と

稱せられてそれ等の人々の面貌にはある恐しい豫感が眉や口の間に追つて居る様に思はれて來た、日々の糧を要望し或はそれ以上のアブク錢に有りつかんとしてその傘下に集まつた人々に對して共弊社の幹部としては何かの途を講じてその要望を満たさねばならぬ破目になつたが雨が天から降つて來る様に錢が降なくても來ないから創立早々幹部は對內的に眼を白黒せねばならなくなつて來た、そこで那部の大地主連中に強談判を開始して有無を云はせず軍用金の幾部を調達して居たのであるがそれとても全社員を潤す程の巨額のものでは無かつたから幹部初め社員一同相變らず尾羽打ち枯らした慘憺たる生活を毎日を送らねばならぬ事になつて來た、ソロ／＼社員からは苦情不平が出初める、それと云ふのも共弊社員たるの有難味が少しも實現せぬからである、肩で風を切つて歩くばかりでは腹の中は一杯にはならない、幹部では發議の結果激烈な演説會を絶えず開催する方針を擲てた。演説會入場料にたいして金貳錢位を徴したからそれで多少の收入を得ることが出來牛肉を煮て酒を飲む位の景氣が附くことになつた、今一つは過激な演説會を開くことによつて共弊社の宣傳をなし民衆を感嚇する便宜を得た、そうしてさへ置けば金錢の無心が比較的容易になるからである。幹部が共弊社を宣傳するには随分苦心を極め世間が思ふ程の融通の利かぬ偏屈屋の固まり屋では無かつた。ある晩鳥取の街に俄かに出火があつた際共弊社では豫て用意して居た社

の微章入りの提灯に火を點じて火事に馳せ付ける彌次馬連中に誰れ彼れどなく貸與した。電燈や瓦斯のない頃であつたから鼻を摘まれてもわからない様な闇の街を走るには提灯はこの上もなく重寶がられ多數の人が社の提灯を鬻して火事場に馳せつけたから群集が殆ど共弊社員一味の様な觀を呈し非常な宣傳になつたといふことである。演説會は主として鳥取、米子の二都市を中心として開催され時としてはわざわざ松江まで出掛けて縣當局攻撃演説會を開くこともあり津山まで遠征することもあつた。なるべく多數の聽衆を來場させるためにはあまり六ヶ敷い事を述べないで俗受けのする痛烈な内容を撰ぶ必要に迫られたが最も効果のあつたのは縣當局糾弾演説であつたから後にはそのみに傾倒するようになつて來た、鳥取では瓦町新地園内の寄席で始終開かれた、此の寄席は聽衆がギツシリ詰まれば四百人位を收容する事も出來たのであろう。又辯士は仲々多數であつたが何と云つても光つて居たのは足立社長の演説であつた氏の演説には聽衆が委く魅了されて眉一つ動かす者もない有様であつた、演説振りに變化があり巧に人心を捕えて且つ激越した調子で官憲を罵倒するのであるから聽衆はそれのみを娛みにやつて來又好きな連中は御互に誘ひ合つて來ると云ふ様な常連が出來る程であつた、演説會が開かれる際は觸れ男が太鼓を叩いて市中を練り歩き今日は切り込みだあと怒鳴つて歩く切り込みとは縣當局や警察部を極端に罵倒しそれを中

止せしめんとする警官と大喧嘩することを意味したもので、「ソラ切込がある」と聽衆も亦人波を打つて押寄せた、辯士が代る代る起つて知事を糞味噌に扱き下し書記官連中を罵倒し而しその施政方針や手腕を批判するのでなく聞くに堪えぬ人身攻撃を何の會釋遠慮もなくやつてのけ何知事はかような破廉恥な事をした卑劣漢であるとか又何々書記官は犬のやうな顔をして居るとか得意満面縱横無盡に非難攻撃をなしその止まる處を知らない有様であつた立會の警官は事を荒立てじと隨分氣を腐らせながら聞いて居るが聞くに聞き兼ねて、「辯士注意」とやると辯士は目を怒らせながら「わしの云ふ事が聞えぬ様にお前は彼方を向いとつたらいいがなあ」と愚弄する聽衆は又一齊に喊聲を擧げて辯士を應援する大抵の場合警官はそれぎり何も云はないで横を向いて仕舞ふのが常であつた。警官の大部分は本縣士族であつて共弊社の豪傑連とはよく知り合ひの間柄であり、且つ門地から云つても舊藩時代の夢醒めきらぬ當時にあつては辯士に威壓され勝ちであつたのでそれ以上押切つて辯士をどうすることも出來ない事情であつた聽衆は何よりこれが面白く演説會の開催される度に詰めかけた。辯士はそのコツを知つて居て益々火の手を高くし要するに「警察が何んだい手が出せる」かと擬勢を示すのが一枚看板であつたのである、明治十四年になるとこの演説會が益々盛大になつて來て共弊社の収入の主な要素をなす様になつたこうして氣勢が昂まつて來ると

各地から應援に馳せつける人も尠くなく岡山縣から來鳥した中川横太郎といふ人の應援演説などは聴衆が競つて詰め掛ける程であつて共黨社員の意氣益々熾んになると同時にその舉動がいよいよ露骨に亂暴を示すようになって來た演說會の内容が縣當局に無暗に當り散らすことを主眼とした結果縣當局に對する不滿不平民衆の要望などが追々系統化されるようになり隨つて因伯二州が島根

縣に合併されて居ることは因伯二州の福利民福を殺くものであると云ふ結論に自然に到達して來たのである。かくて明治十四年の去以降鳥取縣再置論が眞面目に幹部級の人達によつて考究され出す機運となり愛護派の擡頭と相前後して共黨社の機關紙たる山陰新報の發刊となり再置運動が共黨社員の間具體化することゝなつた。(續く)

## 佛印への道

「道と兵隊」續篇 (一)

### 根井友信

武男君、

前便で一寸句はして置いた新作戦が慇々開始され、我々もそれに參加と決定、去る〇〇日 欽寧公路の雷屋村を出發して、此處 鶯籠公路の板利墟と云ふ所へやつて來た。

其の日は灼熱の太陽が照り附けて、やけに暑い日であつた。七月と謂へば内地でも酷暑の候である。まして此處南國では格別で

ある。待ちに待つた前進とて一同の意氣當るべからざるものであつたが數時間の後にはすつかり茹り上つてしまひ、それに自動貨車の上で壽司詰めの儘振り廻されたので、誰も彼もへとへとに參つてしまつた。跳ね上がる砂塵は全身を黄粉まみれにし、それが汗で捏ねられて眞黒になる。それこそ前向きか後向きか見分けられぬ程である。